

誰いうとなく現代まで



ムカデ姫のお墓由来

この墓は南部27代藩主利直の奥方源秀院殿のお墓です。源秀院殿は、蒲生飛騨守氏郷の養妹で、名は於武とって文禄3年(1594)3月、南部家へお輿入れいたしました。その時、蒲生家の祖、俵藤太秀郷が近江の石山で、大ムカデを射止めた時にもちいたと伝えられる矢の根をみやげとしました。その後、利直が亡くなり、於武の方も寛文3年7月26日、江戸桜田の邸で逝去されましたが、姫の遺言によってここに葬りました。当時、お墓の前には濠があつて、南部家ではこれに太鼓橋をかけることになりましたが、いよいよ竣工して渡り初めという日に、一夜のうちにその橋がさんざん破壊されておりました。その後、何回かけても橋がこわされてしまうというので、誰いうとなく、「それは大きなムカデが出て橋をこわしてしまうのだ。」といううわさがたち、そのうわさが殿さまの耳にも入り、たいへん不吉なことと考えられました。そこで、殿さまは墓参の当日に朝早くからたくさん武芸者を見張番につけ、数千人の人夫を雇い入れて、一気にその日のうちに工事を終え、やっと橋を完成させました。しかし、その後もこの附近では俵藤太に射られたムカデの怨霊が何百匹となく毎夜のようにいまわり、姫の百千筋の髪の毛がごとごとく蛇に化け、その蛇はみな片目であったといひ伝えられております。このことが、また城下の評判となつて誰いうとなく「ムカデ姫のお墓」とよぶようになりました。

案内板より

